歪んだStory

異端

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
歪んだＳｔｏｒｙ

【Ｎコード】
Ｎ９８０２Ｒ

【作者名】
異端

【あらすじ】
ある部屋で、ある老人が語る不思議で異端なお話。

老人は語る

夕暮れが過ぎ、暗い夜へと静まる。

途切れ、途切れのオルゴール。

本棚が並び立つ部屋で、一人の老人が古い椅子に座る。

老人の目の前に双子が長椅子に窮屈に座っているのだ。

双子は、13歳か14歳くらいの、ただの少年だ。

老人から見て、右側に座っている少年の容姿は、白い天竺牡丹のような肌、あまり目立たない金に光る髪、虚ろな灰簾石の眼、痛々しくも左腕が無い。

片腕の双子の隣に座っている少年は人形のような容姿に、大きく見開いた丸い苦礬柘榴石の眼、長い亜麻色の髪は女性を連想させる、体中には醜い赤い痣がある。

双子は同じ貴族の正装を着ている。

そんな異形の双子を前にして、老人は微笑むのだ。

老人が衰えた手は、古びた本を撫で、口を開いた。

「昔、昔の話　いつの時代だったか、この代々続く金緑石貴族に一人、少年がいたのだ」

第一話　夏に咲く花と山羊の仔

古びた屋敷、それは上流階級の貴族にふさわしい造形、貴族の欲を満たすためだけの城。
屋敷のまわりには、妖艶というほどの美しい色とりどりの花の庭園。

美しい庭園には使用人が一人、花の手入れをしている。
使用人は、１５か１６ぐらいの青年とも少年とも見られる男性だ。
漆黒の鴉の羽根と見間違えるほどの黒髪、透き通った肌は高級な陶器のよう、黒百合のハナビラのように黒い眼、整った顔立ちは使用人とは思えないほどだ。

彼の名は、クラウン・アレキサンドライト。
名の由来はピエロだ。
この屋敷の持ち主、アレキサンドライト家のしがない使用人だ。
だが、ただの使用人ではない。
彼は使用人という立場の人間でも、アレキサンドライト家の一人なのだ。

さて、彼がなんだというのだ・・・・と思うだろう。
彼は、この話のただの主人公とでも言っておこうか。

――――――――――

「おい、ピエロ。」

朝の美しい庭園の中で、人を呼びとめる声が響く。
振り向いたのはクラウン・アレキサンドライト。クラウンと言おうか。
ピエロというのは差し詰め、クラウンの渾名だろう。
呼びとめたのは、アレキサンドライト家次期当主の候補の一人、アスチルベ・アレキサンドライト。
目立たない金に光る髪に、猫のようなパイロープの眼、それほど濃いとはいえない黒い肌をしている。
アスチルベという男は、１８歳となるというのに自由気ままで愛想が良く、使用人らの中で人気がある数少ないアレキサンドライト家の者だ。
クラウンはこの男を、いつも冷たい目で見るのだ。
「そんな目で見んなって・・・」
クラウンの冷たい目に、アスチルベは変わらず声をかける。
「何の用だ。いつも、いつも。」
「まぁまぁ、そんな毛嫌いしなくてもいいじゃんか。」
「だから何の用だ。」
「お前も相変わらずだな。今日の夜、パーティーがあるんだ。」
アスチルベの“パーティー”という言葉にクラウンは目付きを悪くした。
そんなクラウンにアスチルベは、動じるとともに冷や汗をかく。
「パーティーは・・・あの“お嬢様”が主催してるんだと。」
クラウンの表情は変わらず、花壇の手入れに取り掛かる。
アスチルベは見苦しくもため息をつく。
「俺には関係ないってか。そんな嫌がらなくてもいいだろう。おまえもアレキサンドライト家の一人なんだから。」
重々しい言葉を聞き流しながら、クラウンは白い薔薇をハサミで切る。
「やっぱりでないのか。パーティー。」
「場違いじゃない。」

“自分は場違いだ”とクラウンはきっぱりと言う。アスチルベは苦笑するばかりだ。
クラウンがパーティーへの参加の意思が無いとわかると、アスチルベはクラウンに背を向けた。
背を向けたアスチルベは、ふと何かを思い出し、またクラウンに呼びかけた。
「あっ、ピエロ。今日の夜、パーティーだからいろんなお客さん来るそーだ。もう来てるお客さんもいるそーだよ。」
大きな声で言いながらアスチルベは走って行った。クラウンはただそれを見つめていた。

クラウンは、いつもとどおり花壇の手入れを進めていた。
ポケットに入れていた懐中時計を見ると、１２時を過ぎていた。
それを見てため息をつくと、次の花壇へと向かう。
次の花壇を見ると、クラウンは嫌な顔をした。
花壇の花は春から夏にかけて咲く花、アスチルベだ。
彼の名は、この花壇の花からとったのだ。
嫌そうに花を見つめると、花壇の隣に子供がいた。
子供は男の子。
銀に光る美しい糸のような髪、肌はクラウンの髪よりも黒い。
眼は、まさに山羊の眼だ。
美しい顔の少年をクラウンは見つけたのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9802r/

歪んだStory

2011年10月8日21時59分発行